



(上)9月に終了するグアテマラのプロジェクト評価の一環として、市の観光自治委員会(CAT)のメンバーに活動の成果やその後の方針などをインタビューする石田さん(左)  
(下)観光スポットの一つ、ナフトウニッチ洞窟につながる遊歩道には案内板を設置。散策に訪れた人が楽しめるよう、現在地やその場所にまつわる話を紹介



## 支援は「相手の立場に立つ」 ことから始まる

JICA産業開発部で、観光開発分野の支援を担当する石田美帆さん。地域住民に利益をもたらす観光開発を実現させるため、縁の下の力持ちとしてプロジェクトを推進している。

### 大

学時代に東南アジアなどの開発途上国を訪れてから、ODA(政府開発援助)、中でも途上国に低利で融資した開発資金の返済を求め、自助努力を促す円借款への関心が高まりました。そして国際協力銀行(JBIC、当時)

に就職し、最初に配属されたのが企業金融部。海外に進出する日系企業への融資が主な業務で、直接ODAの仕事ではありませんでしたが、日本のものづくりを支える製造業の方々と接するうち、徐々にこの分野の面白さにのめり込んでいきました。しかし同時に、いずれはODAにも携わりたいという思いがあり、新JICA設立1年前の2007年に、希望して中央アジア地域への円借款を担当する部署に異動しました。

そして現在は、観光分野の技術協力を担当しています。これまで「観光」は、多くの側面だったので、開発については多くの素人。最初は、目の前の仕事をこなすので精いっぱいでした。しかし今は、より現地のニーズに合った観光開発に向けて、いかに先を見越しながらプロジェクトを進めるべきか、日ごろから考えています。

例えばグアテマラでは、自然、遺跡、先住民文化など観光資源が豊富にもかかわらず、それらが十分に活用されてい

ません。外から来る観光客にとっては魅力的な観光資源でも、地元の人には当たり前すぎて、その価値や魅力に気付いていないことが多いからです。まずは自分たちの周りにどんな観光資源があるかを発見してもらおう。次は、それをどう売り込めばよいかを考えてもらう。考えて、やってみて、また考えて……。そんなふう

に、地域の人々が自ら考え、行動することができるよう、広い視野で彼らを導いていくことが、JICAの役割だと思えます。「観光開発」と聞くと、リゾート開発やテーマパークの建設などを想像しますが、JICAが重視するのは、貧困削減につながる観光開発。大規模な投資をした企業だけでなく、貧困層も含めた地元の人々が一丸となり、地域の観光ポテンシャルに基づいた最良の観光開発を進め、地域全体が潤うことが大切だと考えています。(8ページに関連記事)。

また観光開発には、政府機関、ホテルやレストランなどの経営者、土産を売る地域住民など、あらゆる組織や人々が関わっています。それぞれの意見をくみ上げ、皆が納得できるような活動をまとめ上げるには、柔軟で臨機応変な対応が求められます。それが、この分野の支援の難しさであり、また面白さでもあります。中でも重要なのが、「人を集める」という



JICA産業開発部  
産業・貿易課

石田 美帆  
ISHIDA Miho

大学卒業後、2003年国際協力銀行(JBIC)に就職。企業金融部(当時)、08年10月の新JICA設立後、東・中央アジア部を経て、09年5月より現職。

基本的なこと。「観光促進のための研修を行いますよ」と住民を誘っても、それが自分自身にどう役立つのかを理解してもらえない限り、集まってはくれません。また、彼らには彼らの人間関係があり、それが活動を妨げることもあります。例えば、足場の悪い遊歩道に手すりをつくらうと思っても、住民グループ同士がちょっとした諍いや対立が原因で、意見がまとまらないこともよくあります。

そこで、私が日々心掛けてるのが、「相手の立場に立つて物事を考える」ということ。意見が合わず、無理難題を一方的に要求されると頭にくることもありますが(笑)。でも、そんな時でもお互いにとって良い方法があるはず。相手には相手なりの言い分やそう主張する理由があるのですから、まずはコミュニケーションをしっかりと取り、信頼関係を築くことが、最初の一步。それが目標を達成するための近道だと信じています。



外資系ホテルや特定の観光スポットに観光客が集中していたパレスチナのジェリコ市では、刺しゅう細工(写真)など魅力ある土産物を開発中。町のパズールなどにも立ち寄ってもらい地域全体が潤うよう、努めている